

# ボランティアにおける「わたらしいわたし」

—— ボランティア活動に対するいくつかの視角Ⅱ ——

新 矢 昌 昭・渡 邊 秀 司

## 要 旨

この小論は、ボランティア活動を行う個人的な目的と現代の社会状況の変化との関連を考察するため、外国人支援ボランティア活動に対する調査に先立ちいくつかの分析のための視角を提示することにある。現在、ボランティア活動においてアイデンティティの確立や「自分探し」ができるように言われている。この調査研究では、人々が「本当に」ボランティア活動においてアイデンティティの確立や「自分探し」としての「わたらしいわたし」を求めているのか、そこからまた何故それらが可能となると思っているのか、を明らかにしてみたい。本稿ではこの調査研究の前提として、アイデンティティと「自分探し」についての整理と両者の関係性について考えるとともに、またボランティアをすることによって何故「わたらしいわたし」が見つかるかとされているのかについて考えてみたい。

## はじめに

次のような引用から始めてみたい。「ボランティア活動の基盤発展は、ボランティア活動が自らのアイデンティティを発見し、活動することが相互の互惠主義の確立になるのではないのでしょうか」(リファレンス 2003)。また、『「自分探し」の旅に出かけよう!』というタイトルを付け、次のようにボランティアを紹介している。「自分にどんな活動ができるだろうと考えたら、自分の日常や自分のこれまでの生き方を振り返ることができます。そして、活動を始めると、自分自身と向き合い、見つめ直すことができます」(平群町社会福祉協議会 2003)。他にも、ボランティアにおいてアイデンティティを確立することや「自分(わたし)探しができる」ことが実にさまざまに語られている。この調査研究を通して考察したいのは、何故人々がボランティアをすることによって、アイデンティティの確立や「自分探し」ができると思うのか、

を問うことある。そこから、本当にボランティアにおいて、このアイデンティティの確立や「自分探し」ができるのかを問い、更に、アイデンティティの確立や「自分探し」を人々に促す社会的な背景も考えてみたい。もちろんすべての人々が、アイデンティティや「自分探し」を求めてボランティアをしているわけではないだろう。しかしながら、少なくともボランティアには上記の引用に見えるようにそのような可能性を持ち、またその魅力の一つとして存在していることも確かである。だが、そもそもボランティアにおいて、アイデンティティや「自分探し」を位置づけることが何故可能とされているのだろうか。そこで本稿では調査の前提として、まずアイデンティティと「自分探し」の用語について整理し、次にその関係性について考えてみたい。そしてボランティアの考え方から、どのようにアイデンティティや「自分探し」が可能とされるのかを考察したい。

## 「わたらしいわたし」

アイデンティティや「自分探し」とは「わたし」に関わることである。このアイデンティティと「自分探し」とはなんだろうか。そして両者は「わたし」にどのように関わり、どのような関係性を持っているのだろうか。

アイデンティティは、単純に意味を示すことはできない。何故なら、ナショナル・アイデンティティやエスニック・アイデンティティ、セクシュアル・アイデンティティなどアイデンティティはさまざまな意味をもって使われているからである。では、そもそもアイデンティティとは、何であろうか。このアイデンティティの用語を世の中に広めたのはE・H・エリクソンである。しかしながら、エリクソン自身はこの用語をさまざまに使い明確に意義づけられているわけではない。ただ、彼の言うアイデンティティとは、二つの側面から形成されていると思われる。第一は、心理的・社会的にアイデンティティが確立される考えである。

心理的なものと社会的なもの、発達のものと歴史的なものとの間の全ての相互作用は、一種の心理社会的相対性としてののみ概念化されうるものであり、アイデンティティの形成はそのような相互作用によって原型としての重要性をもっているのである（エリクソン 1973a：16）。

さらに、別のところでは、「心理的・社会的」によって形成されるアイデンティティを次のように説明している。「心理社会的アイデンティティは、主観的であると同時に客観的であり、個人的であると同時に社会的であるという特徴をもつ」（西平 1993：206）。

そして第二は、アイデンティティが人間の発達段階の形成過程の中で形成されることである。

とりわけ、青年期という「アイデンティティのさまざまな構成要因（中略）を統合するための猶予期間<sup>ゆうよきかん</sup>」で形成される（エリクソン 1973a：167）。また青年期の「アイデンティティとは、（否定的なものを含む）すべて以前の同一化〔自分にとって重要な影響力を有する人との一体感または同一視〕や自己像の統合を意味」する（エヴァンス 1981：44）。しかしエリクソンが「アイデンティティとは、パーソナリティ特性とか、または、何か静態的で不変なものの形をした『成果』として『達成』されるようなものでは、決してない」（エリクソン 1973a：17）としていることには注意しなければならない。つまり、アイデンティティは、ライフサイクルの中での児童期から成人期の間に位置する青年期において確立しなければならない課題なのであり、他者関係によって成立する。そしてアイデンティティは青年期において固定化されることではなく、発達とともに変動するのである。

このように、アイデンティティとは、個人の発達段階において心理的、発達の、主観的、個人的、という個人の内面性に関わるものと、社会的、歴史的、客観的、他者という個人の外面性との相互作用によって形成されるのであるが、それは一定ではなく変化していくのであると言える<sup>1)</sup>。

では、ここで触れる「わたし」としてのアイデンティティとは何であろうか。それは、エリクソンの言う「自我同一性」（ego identity）が近似すると言えよう。自我同一性とは「時間的な自分の自己同一 self-sameness と連続性 continuity の直接的な知覚と、他者が自己の同一と連続性を認知しているという事実の同時的な知覚」である（エリクソン 1973a：10）。またエリクソンは、この「自我アイデンティティ」と「自己アイデンティティ」と区分している。

自我の総合化能力をその中心的な心理社会的機能に照らして議論するとき、ひとは自

我アイデンティティについて語りうるのであり、また、個人の自己イメージと役割イメージとの統合を論議しているとき、ひとは自己アイデンティティについて語りうるのである（エリクソン 1973b : 294）。

しかし、エリクソンはこの両者の一致をアイデンティティとすることもあれば、両者を「自我アイデンティティ」とすることもあり、エリクソン自身は十分整理していない（西平 1993 : 256）<sup>2)</sup>。このようにエリクソンのアイデンティティは難解であり、簡単に定義することを許さないものである。だからこそ様々にアイデンティティは概念付けられていると言えよう。例えば、石川准は、多様化する役割や関係などにおいて他人と区別する「わたし」らしい独特な全てがアイデンティティを構成する。複雑な「わたし」を取り巻く環境や状況の中でも「全部をひっくりめたものが『わたし』だ。要するに『わたし』とはアイデンティティの集合、アイデンティティの束だということ」なのであると言う（石川 1992 : 14）。また大場健は「社会的な役割を表わす言葉による、自分で納得のいく自己定義」とする（大場 001 : 12）。ただ、ここでは次のようにアイデンティティを考えておきたい。社会、他者との関係性の中で「わたし」自身を確認することがアイデンティティである。従って、アイデンティティとは社会に対する役割とそれに対する自己のイメージとを一致させた「わたしらしさ」を、社会の中での他者によって認められることによって、一貫した「わたし」を安定させることであると言えよう。簡単に言えば、「わたしらしさ」を構成する役割関係に対する「わたし」の一致を他者に承認してもらうことがアイデンティティである。

またアイデンティティは近代的な個人に要請されるものである。近代的な個人は、「わたし」という存在のすべてを、自分自身の自由な意思で選びとり、つくりあげてゆかなければな

らないということをも意味」するからである（若田 1997 : 68）。

次に「自分探し」は、1980年代後半から社会的に顕著になった言葉である。「自分の中には何か『現状の生活』にはあらわれていない『本当の自分』（可能性）というものがあり、それこそが『自分らしい』生き方」を探ることである（芳賀 1999 : 31）。「本当の自分」を探す「自分探し」とは、「いま」の自分には満足できず、或いはどこかにある「わたしらしさ」を探そうとする試みだと考えることができる。

以上からアイデンティティと「自分探し」に共通して言えるのは、「わたしらしいわたし」である。では、この両者はどのように関係しているのだろうか。それは、アイデンティティの持っている意味が危機を迎えることによって、「自分探し」が顕著になってきたことにあると思われる。用語としてのアイデンティティの持っている意味は、社会的な役割を他者との関係の中で一貫した「わたし」を「わたし」で確認していくことであった。しかし現代の多様化した社会では、一貫した「わたし」を社会の中や他者によって見出しにくい。何故ならば、多様化している社会の中では、「わたし」は余りにも多くの役割を負わなければならないからだ。ここからは役割に対しての「わたし」をすべて一致させることができない「わたし」がいることになる。そうするとアイデンティティが課している一貫した「わたし」は、苦しみをとまなうこととして受け取られるであろう。アイデンティティという用語は、一貫したアイデンティティを確立しなければならないと「わたし」に課することで、確立できない「わたし」を焦燥的に追い詰めてしまうからである。このような結果、現代の社会で顕著になっているのが「自分探し」という「わたし」への問いであったと思われる。そのことは、「アイデンティティ探し」と言わないで、「わたし探し」が叫ばれている今日の状況から伺える。「わたしらしいわたし」はア

アイデンティティではなく、「わたし」へとシフトしているのである。役割はある。しかしそこには「わたし」がない。この「わたし」ではない「本当のわたし」とは何かという問いである。何故なら、一貫した「わたし」がこの世界の中で位置づけることができないと、いまの「わたし」とは異なる「本当のわたし」がどこかにいるように思えるからである。つまり、「自分探し」とは、アイデンティティを獲得できずにいる不安ないまの「わたし」ではなく、なおもアイデンティティを獲得できるかのような「本当のわたし」を探し当てることである。アイデンティティを補完するものとして「自分探し」を行うのである。「自分探し」とは、アイデンティティが不可能であるとうすうす気付きながらも、「なおわたしたちは自分の中の空洞を埋めるために、これがわたしだと主張できるような何か、何でもいい何かを見いだしたい、と願わずにはいられない」ことなのである（若田 2002: 138）。従って、アイデンティティと「自分探し」との関係は、なおもわれわれが近代的な個人である限り、アイデンティティが要請される「わたし」の前提としての自己再確認作業と言えよう。このことから、「自分探し」はアイデンティティを深めたと言える。しかし、そのような「自分探し」を更に積み重ねたとしても、そこにあるのは「本当のわたし」ではなく焦燥感を抱いた「わたし」でしかない。「ほんとうの自分」がまずあって、それが他人にさまざまに写るというのではない。自分で見えない自分と他人に見える自分とを統合していくことが自分である。『『ほんとう』の自分とは、じっさいには『こう映ってほしい』自分の姿でしかない』からである（大庭 2001: 113）。

このように両者ともに「わたしらしいわたし」という幻想があると言えよう<sup>3)</sup>。その両者が幻想であるのは、社会が多面的になってしまい自らが分裂してしまうことになりかねないのにも関わらずに、近代的な個人としてアイデンティ

ティを要請されるからであり、そして「自分探し」は「本当のわたし」という答えのない答えをあるつもりで捜し求めるからに他ならない。「わたしらしいわたし」とは幻想であるにもかかわらず、その幻想を確かな「わたし」として「わたし」が思い込むことである。では、「わたしらしいわたし」という幻想を、確かな「わたし」として思い込むとはどのようなことなのか。それは、両者における他者の視点である。「わたし」として、「わたしが〈わたし〉でありうるためには、わたしは他者の世界のなかに一つの確かな場所を占めているのでなければならない」（鷲田 1996: 119）。このようにして「わたしらしいわたし」という幻想を、他者との関係によって「わたし」は確かなものとして思い込むのである<sup>4)</sup>。

以上から考えると、ボランティアにおけるアイデンティティの確立や「自分探し」は、他者によって「わたしらしいわたし」が形成できるという幻想を「わたし」が思い込みたいことであると言えるだろう。また他者によって「わたしらしいわたし」を思い込むことができることから、賞賛する側はボランティアによって他者と交わり、必要とされる「わたしらしいわたし」をその中で発見できるとしているのではないだろうか。そこで前者は調査を通して考えることとし、後者について若干考えたい。

## ボランティアと

### 「わたしらしいわたし」の位置づけ

そもそもボランティアにおいて「わたしらしいわたし」の形成が、何故可能とされているのであろうか。「わたしらしいわたし」と関係すると思われる若干の先行研究から検討してみよう。入江幸男は、ボランティアの条件について、個人のボランティア活動、ボランティア団体の条件、ボランティア団体の専従職員に分け、また、ボランティアの捉え方として、チャリティー、

自己実現、社会参加を挙げている。ここでは個人の活動条件と自己実現のみを取り挙げる。前者について入江は「自発性」、「無償性」、「公共性」を示している。自発性は「自分で状況を認識し、自分で価値判断を行い、自分の責任で行為する」ことである。そしてこの自発性が成立するのは公共性の中であり、その公共性とは、活動が社会や人に役立つことである。また無償性とは経済的な報酬を目的としないことであるが、贈与ではなく個人的な利益から解放されることや自己の変身、普遍的な議論や行為につながるなどの「相互性」を重視することである。そして後者は、ボランティアが「仕事と遊びの中間」に位置づけられることから、この「遊び」にあたることを自己実現としている。入江が強調するのは、ボランティアを社会的に位置づけるための公共性である。この公共性とは、ボランティア活動が市民の相互承認と自立的な問題解決を図るという新たな「市民的公共性」である。そして公共性の必要性はわれわれが「見られ、聞かれ、批判される」ことを通じて公的に認められ、自他共にアイデンティティを認められるからだと言う（入江 1999：5-16）。ここから伺えるのは、「わたらしいわたし」は公共性を持っているボランティアをすることによって、可能となることである。このような考えは、他にも見られる。例えば、吉村恭二も現在のボランティア活動に参加するのは、多くの人々が『自分』を問い、意味のある生き方を求め始めている」からだと言う。そしてボランティア活動に参加する意味は、「困っている人のため」だけではなく「自分の潜在能力」を発揮し、他者や社会との関係の中で、「自分の位置を発見すること、つまり自己の人間としての可能性を発見する喜びにある」（吉村 1999：42）としている<sup>5)</sup>。

このように、ボランティアをすることによって、他者や社会との関係から「わたらしいわたし」が再発見できるとされている。正しくこ

のことは、「わたらしいわたし」を成立させる条件をボランティアが示していると言えよう。しかし「わたらしいわたし」は幻想でしか過ぎないのだが。では、そもそものようにして人々は「わたらしいわたし」を形成できると思い信じているのだろうか。

#### 注

- 1) エリクソンには、「静態的で不変なもの」ではないという考えがあるが、これはライフサイクルを通して一貫したアイデンティティが確立されなければならないことと矛盾しない。その「静態的で不変なもの」ではないのは、例えば、青年期から成人期への移り変わりの時である。
- 2) なお、エリクソンは、「わたし」「自我」「自己」をも区別している。ただしこの三者の区別とアイデンティティの関係についても明確にされていないと思われる。これを扱った論考については、西平（1993）225ページ以降が参考になる。
- 3) 以下では、特に注意しない限り、便宜上両者の共通する意味から「わたらしいわたし」として同義に扱い区別しない。
- 4) 「わたし」の形成は「自己物語」論に関係すると思われるので、この考察については、ボランティアと「自己物語」論に関係させて後日行う。ただここで指摘しておきたいのは、「わたし」は物語という幻想にしか過ぎないことである。
- 5) また別の箇所では、次のように言う。『自分』を他者の関係のなかでとらえながら、『自分』を大切に生きて生きる、（中略）自分が全体とかかわって存在することを意識して生きていくボランティアの思想は新鮮である（吉村 1999：185）。

#### 文 献

- 石川 准, 1992, 『アイデンティティ・ゲーム 存在証明の社会学』新評論。
- 入江 幸男, 1999, 「ボランティアの思想」内海成治他編『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社。
- エヴァンス, R・I., 1981, 『エリクソンは語る』岡堂哲雄, 中園正身訳, 新曜社。
- エリクソン, E・H., 1973a, 『アイデンティティ』岩瀬庸理訳, 金沢文庫。
- エリクソン, E・H., 1973b, 『自我同一性 アイデンティティとライフサイクル』小此木啓吾訳編, 誠信書房。
- 大場 健, 2001, 『私という迷宮』専修大学出版局。

芳賀 学, 1999, 「自分らしさのパラドックス」  
富田英典・藤村正之編『みんなぼっ  
ちの世界』恒星社厚生閣.

西平 直, 1993, 『エリクソンの人間学』東京大  
学出版会.

平群町社会福祉協議会, 2003, 「ボランティア」  
([http://www.heguri-shakyo.jp/vol  
unteer.html](http://www.heguri-shakyo.jp/volunteer.html), 2003.11.20).

リファレンス, 2003, 「ボランティアを考える」  
([http://www.reference.co.jp/maga  
zine/welfare/volunteer8.html](http://www.reference.co.jp/magazine/welfare/volunteer8.html), 2003.  
11.20).

吉村 恭二, 1999, 『ボランティアの世界』築地書  
館.

若田 恭二, 1997, 『終末の予感ーわれわれの時代

の診断書』せりか書房.

———, 2002, 『〈わたし〉という幻想, 〈わた  
し〉という7呪縛ー精神病理学的政  
治学序説』せりか書房.

鷺田 清一, 1996, 『自分・この不思議な存在』講  
談社現代新書 JEUNESSE.

#### 付記

本小論は平成15年度佛教大学特別研究助成（代  
表：大東貢生）による研究成果の一部である。

（しんやまさあき

佛教大学総合研究所研修員）

（わたなべしゅうじ

佛教大学大学院社会学研究科博士課程）